



LUNO TEO



森のお茶会

A white peach and a field strawberry



碧月サーカス団の飛行船は、満天の星空の中を次の目的地に向かって進んでいる。

その一室で、ヘーゼル団長、レプス、ミハルがテーブルを囲んで座っていた。

団長とレプスは話しこんでいる様子で、ミハルは足をぶらつかせながらテーブルに画用紙を置き落書きをしていた。

「なんで俺があいつと会わなきゃいけないんだよ」

レプスは団長に向かって不機嫌そうに言う。

「ノクト様のお誘いとなれば断るわけにいかないだろう。このサーカス団のオーナーはあの方なんだから。それにラビ君も来るそうだよ、会いたいだろう」

「……別に誰があんな奴に……」

「ラビも来るの？ ぼく、ラビに会いたい！」

ラビの名前を聞いて、ミハルは落書きの手を止め、勢いよく二人に言った。

「ミハル……」

「ねえ、レプスもラビに会いたいでしょ？」

「べ、別におれは……」

「ふう、やせ我慢しなくていい。会いたって顔に書いてあるぞ」

「なっ……」

団長の言葉に、レプスは思わず頬に朱を刷いた。

* * *

一行が目的地へ向かうと、そこにノクト、ラビ、執事のアマンドが、車を背にして待ち構えていた。

ノクトは、ラビの耳元で内緒話をするように何かささやいている。レプスはラビをちらりと見たが、その光景に腹を立てすぐ目をそむけた。

「わーい、ラビー」

と、ミハルがラビに駆け寄り抱きついた。

「元気だったか？」

ラビはミハルを受け止め、優しく抱きしめる。

ミハルは、ラビから一旦離れると後方にいたレプスの手を引っ張り、ラビの真正面まで彼を連れてきた。

「レプスもね、ラビに会えるの楽しみにしていたんだよ」

「バカ、おれは……別に楽しみになんか……」

「俺は楽しみにしていたけどな。お前とミハルに会えるの」

そうラビに言われて、レプスは彼の方を見るがまたすぐに目を逸らす。

「……馬鹿じゃねえの……自分でおれらのこと見限ったんだろ」

「まだそんなことを言っているのか……相変わらずガキだなレプス」

「何だと!!」

「もう、ふたりとも喧嘩しちゃだめ。せっかくやっと会えたのに……」

ミハルがラビとレプスの仲裁に入る。

ノクトがミハルのところにやってきて、彼の頭をなでながら「ミハル君が一番大人だな」と言った。

「くそっ」

レプスは苛立っているようだ。

「ねえねえ、森の中には桃や野苺がたくさんあるでしょ。ラビ、レプス、一緒に取りに行こう」

ミハルは二人の手を取り、誘うように引っ張った。

「……ミハル……」

「……ま、ミハルが言うならしょうがないな」

「三人とも気をつけて、あまり森の奥に行くんじゃないぞ」

ノクトは、その場にとどまり三人に向かって言った。団長、アマンドも三人を見送る。

* * *

大人たちは、車を止めてある野原にとどまっていた。

「ふたりの……レプス君とミハル君の様子はどうか、ヘーゼル。サーカス団でうまくやっているのか？」

「毎日ご報告しているとおりですよ、ノクト様」

団長は、平然とした様子でそう言った。

「きみの報告だと、レプス君も少しは成長している感じだったようだが……あまり変わっていないんじゃないかな？ 相変わらず僕のごことは嫌っているようだけど」

「そんなことはないはずですよ。ノクト様のごこともお慕いしているはずです」

「いや、まったくもってそんなふうには見えなかったけど……」

「あれは、照れているのです」

「照れている？ あれがかい??」

「彼は典型的なツンデレですからね」

「ツンデレ……ねえ……」

* * *

ラビ、レプス、ミハルの三人は森の中に入っていく。野苺や桃が、あちこちになっていた。

「見て見て、こんなにたくさん苺がなってるよ！」

ミハルは、ラビとレプスに振り返りはしやぎながら言った。

「あまり遠くに行くなよ、ミハル」と、レプスが言う。

「はあい」

ミハルは返事をする二人の少し前方を小走りに進んでいった。

「野苺と白桃がこんな季節にいっぺんに……おかしくないか？」

レプスは、いぶかしげに眉を寄せる。

「あいつが仕込んだんだろ？」

「あいつってノクトか？ そんなことまで出来るのかよ」

「まあ、出来るんじゃないか？ その位」

しばらく二人の間に、また沈黙が落ちた。

「……お前はいいよな。あのお屋敷でぬくぬくとアイツと暮らしているんだろう」

「お前にだって申し出があっただろう。ノクトから自分の養子にならないかって」

「誰があんな奴に面倒見てもらうかよ」

「まあ、実際はサーカス団の資金援助もノクトがしているんだから、面倒見ているのと変わらないけどな。それと、言っておくけど俺はあの屋敷には住んでないよ」

「えっ、じゃあどうしているんだ？」

レプスは、思わずラビの顔を見た。

「いまは、寮生活だよ。学生寮」

「リョウ？ じゃあ、アイツ……ノクトとは一緒に生活していないのか？」

「だからそう言っただろう」

「な、なんだ……ふうん……そうか……心配して損した」

「何を心配していたんだ？」

「べ、別に何だっていいだろう」

ミハルはふたりから少し離れたところで、ウサギを見つけた。

「わあ……かわいい……」

ミハルは、ラビとレプスのいる方に振り返り、「ラビ、レプス、ウサギさんがいるよ！」と叫んだが、二人の耳には届いていないようだった。

「うーん」

ミハルがまたウサギがいた方に目をやると、ウサギは二匹に増えていた。

「わあ……」

ミハルは目を輝かせて、二匹のウサギを追いかける。

ラビとレプスは、そんなミハルには気がつかず言い合いを続けていた。

「お前の方こそどうなんだ。ちゃんとサーカス団でやっているのか？」

「当たり前だろ！ おれさまは、どこに行ったって完璧だ」

「そうか？ この間、観に行った時は、バンドネオンの音はずしていたぜ」

「なんだと！……ん？……って言うかお前、いつ観に来ていたんだ？ 一言いってくれれば……」

」

「おい、レプス、ミハルは？」

ラビがレプスの話を遮る。

「あれ、ミハル……どこに……」

二人はあたりを見回すが、ミハルは見当たらない。

「はあ、前にもこんなことあったな……」

「そうだったな。そんなに遠くには行ってないだろうから手分けして探そう」

「ああ」

ミハルは、二匹のウサギを追いかけていた。

「待ってー」

ミハルは勢いをつけ、二匹に飛びかかる。が、ウサギはするりとミハルの手をすり抜けて、どんと森の奥に逃げていく。

彼は勢いよく地面に滑り込んだので、服を土で汚してしまい、膝もすりむいてしまった。そのまま座り込んで傷を確認すると、思いのほか血が出ており、痛みも徐々に増してきて泣きそうになる。

「……泣かないもん。レプスと約束したんだから。ママが見つかるまで泣かないって……」

すると、どこからか足音が聞こえてきた。

その方向を見ると、少年らしい人影があった。

「レプス！」

返事がない。

「ラビ……？……あれ、違う……帽子がない……」

少年の姿がはっきりする。

全体に色素が薄く、髪は明るい金色だった。白いマントをはおり、黒い仔猫を肩に乗せている

。

「ヨダカ……」

少年はミハルをそう呼んだ。その名前は、ミハルの母が特別な時にだけ、ミハルを呼ぶ名前だった。

「誰？」

ミハルが聞いたが彼は答えなかった。

「怪我をしている」

少年はその場にかがむと、ポケットから小瓶を取り出した。そこから紅茶の葉のような乾燥した草をひとつまみ手のひらに載せ、ミハルの膝の傷に向かって息を吹く。

葉がキラキラとミハルの傷の周りを舞うと、傷がみるみる治っていった。

「わあ、凄い！ 治った！ ママみたい」

「僕と一緒に来れば、君の背中傷も治せるよ、ヨダカ」

「どうして、ぼくの傷のことを知っているの？ それに、ヨダカって名前のことも」

「それは、君がヨダカだからだ」

少年は答える。

ミハルは、少年の髪にある羽をじっと見ていた。

「その羽、ママにも……」

ミハルが手を伸ばして羽に触れようとした時、別な足音が聞こえてきた。慌てて走っているような音だった。

「ミハル！」

「あ、ラビ！」

ミハルは、ラビの姿を見て立ち上がる。

「誰かいたのか？」

「うん、ぼくの膝の怪我を治してくれた子が……あれ、いない……」

いつの間にか少年はいなくなっていた。

「……レプスのところに行こう。心配しているぞ」

「うん」

ミハルはラビと手を繋ぐ。

しばらく歩くとミハルが話し始めた。

「あのね、ラビ。レプスはね、いっぱいラビにお手紙書いてるのにいつも送らないんだよ。全部丸めて捨てちゃうの。もったいないよね？」

「ああ、そうだな」

「でも、今日は外でお茶会だから、お手紙書かなくてもレプスとラビ、いっぱいお話しできるね」

「……」

「おーい、ミハル！ ラビ！」

レプスの姿が前方に見えた。必死でミハルを探していたようで息が荒い。

「あ、レプス!!」

ミハルは、レプスに駆け寄って彼に抱きつく。

「勝手にひとりでどっかに行くなよ。心配をしたんだぞ」

「ごめんなさい」

「服が汚れているな、ミハル。転んだのか？ 怪我したりしなかったか？」

レプスは屈むと、ミハルの服に付いた汚れをはたき落としながら聞いた。

「ちょっとだけ擦り剥いちゃった。でもね、知らない男の子がぼくの怪我を治してくれたの。その子ママみたいに髪の毛に羽が付いていて、綺麗だった」

「知らない男の子？……おい、ラビ」

再びレプスは立ち上がりラビの方を見る。

「残念ながら俺は見ていない」

「そうか……そいつ、まだその辺に……」

「ねえ、レプス、ラビ、苺摘もうよ」

「そうだな、今日は苺狩りに来たんだったな」

ラビがそう言って、ミハルの頭をなでる。

指をパチンと鳴らすと、数匹の青い蝶たちが摘んだ苺を入れるのに手頃な籠を運んできた。

「けど、ラビ、それどころじゃ……。もしかしたら、そいつ、ミハルと……」

「そのガキのこと探すなら一人で行けよ」

「なんだと」

「さあ、ミハル、俺と一緒に苺を摘もう」

ラビはミハルの手を取る。

「うん、ラビ！」

ミハルも笑顔で答えた。

「ああ、わかったよ。おれは、探すからな」

ミハルが、歩き出そうとしたレプスのズボンのすそを掴む。

「レプス……レプスも一緒に苺摘もう。せっかくラビに会えたんだよ」

「けど、ミハル……」

「……」

ミハルはうるんだ目でじっとレプスを見上げる。

「わ、わかった。かわいいミハルの頼みだからな」

「よかった！」

三人の近くにまたウサギたちが通り過ぎていった。

そりゃ、おれだって……今日を楽しみにしていたよ。

* * *

「三人とも、なんとかうまくやっているようですね」

アマンドがノクトに言う。

「時々ものすごく嫉妬するよ。誰か僕のこと思い出してほしいもんだ」

そう言いながら、ノクトは紅茶の注がれたカップをのぞく。

そこにはラビ、レプス、ミハルの三人の様子が映し出されていた。

ノクトがカップを持ち上げると、紅茶が波打ち三人の姿は消えた。彼はそのまま、一口飲む。

「けど……あの少年、気になるな。この森にもぐりこんでくるとはね」

* * *

「これだけあればお茶会ができるな、ミハル」

「これからも、ずうっと三人でお茶会しようね？ 約束だよ」

「ああ、約束だ……」

三人は籠いっぱい桃や苺を集めるとノクトのいた場所に戻って来た。

そこには、野外用のテーブルと椅子が用意され、お菓子やサンドイッチがテーブルに所せましと並べられていた。

「さあ、お茶会をはじめようか」

* * *

ラビ、レプス、ミハルは、ミハルを真ん中に寄り添いながら木陰で寝ている。

こっそりノクトが、眠っている三人にカメラのレンズを向け、シャッターを下ろした。

「はあ、やっぱりうちの子たちは皆かわいいな」

「寝込みの写真を撮るとは……坊っちゃん……」

「坊っちゃんと呼ぶなど言っているだろう。それに自分の子供達の眠っている姿を写真に撮るのは、普通だろう」

「そのにやけ顔、しまりがありませんよ。とても世界を率いるルノ・ノクトの代表とは思えません」

「そりゃかわいいわが子を前にすれば、親というのは皆そういうものだろう。よし、これは僕の待ち受けにしよう」

「皆またしばらく会えないのですね」

「ああ、そうだな。しかし、離れていても僕たちは家族だよ。例え血がつながっていなかろうとね」

そう言ってノクトは、柔らかく微笑んで三人の寝顔をしばらくの間見つめていた。